明るい未来

ヤマダヒフミ

人類は幸せだった。とうとう、念願の不老不死を手に入れたのだった。
あらゆる欲望もまた克服された。性欲、睡眠欲、食欲、は新たな脳生理科学によって抑制され、代わりに人間の脳神経に対しては絶えず「快」のパルスが流され続けた。
そこは天国だった。人間はもう余計な苦労や肉体にまつわる気苦労などはなくなった。人間の肉体と感覚に関するあらゆるデータは計測され、それは常に適正の値に調節され、古くなった臓器はすぐにより新しくなった新型の臓器に取って変わられた。最高だ。
排泄物が出ないように調節された栄養素を絶えず、血管の中に送り込み、各自の遺伝子を分析し、それぞれの身体状態に見合った栄養素が送り込まれた。完璧だ。
そうやって、人間はまるで、植物状態のように、体にあらゆる見えない線やら、細い管を取り付けて、永遠とも見える夢を眺めていた。
そこは正しく天国であり、何の文句もないどころか、そんな文句など(文字通り)脳細胞のどこにも起こらないような完璧なシステムであった。
だが――ある日、その中で、恥知らずにも、ある人間がこう言う事を言い出した。(人は人工頭脳で互いにつながり、巨大な電子空間において他の「人」(全員が同じ顔をしている)と出会うこともできたのだ。)彼は、科学者の一人で、まだ歳若かった。彼は未だ形式的に残っていた、全人類有識者会議(それももう廃絶を求められていた――人類に解決する問題などもう残っていないではないか!)の席上で彼はこう言ったのだ。
「私達は、こんな風に、体に管や線を取り付けて、絶えず、快の状態に置かれて、そんな状態で生きていると言えるのでしょうか?私達はいったい何故、生きているのでしょうか?・・・私がこんなことを言うのは根拠のない事ではありません。私達は、こうした状態にあっても、日々思考し続けます。この思考は流された快のパルスを反復し、反芻するためにある、と第二回全人類科学会議で全会一致で採択され、可決し、「思考」は残されることとなりました。・・・ですが、私の思考はそうではありません!・・・私の思考は、もうこうした状態に飽いて、次の世界に飛び出したがっているのです。・・・はっきり言って、私はこうした快の状態にうんざりしているのです!・・・もう、いやなのです!・・・飽きたんです!・・・永遠の眠りについている事が!・・・もちろん、私はよく分かっています。私が間違っている事が。人類にとっての幸福は今の状態だと言うことが、第一回全人類有識者会議で最重要な課題として定義され、永遠の真理として額縁に飾られたという事が。・・・だが、しかし、私ははっきり言ってもううんざりなのです。私にとって、私の思考にとって、快とは不快なのです!・・・そして、これは私にとってだけ限った問題ではなありません。・・・次のデータを見てください。(データが各人の前に示される)ここ最近、「エラー」として処分されている人類の数は増え続けています。・・・彼らはこのシステムに適応できず、快のパルスを上手く受け付けない不良品で処分され続けていますが、このシステムが生まれて少しした後から、こうした「処分者」は増え続けているのです!・・・そうです、こうした人達も正に私と同じように思考による苦痛を感じているのではないでしょうか?彼らもまた私と同じように、同じ状態で、「快」の状態で生きる事に苦痛を感じているのではないのでしょうか?・・・そうです!そういうことです!・・・私は人類をこのシステムから解放する事を、提案いたします!・・・いや、まず、全人類に正気に戻ってもらって、このシステムが人類にとって本当に良いものかどうか、もう一度、真剣に検討するべきです!・・・私はそう提案します!・・・もしこの提案が受け入れられないなら、私の思考を消去してから、私を処分してください!・・・これなら死んだ方がマシだから」
その若い科学者のその真剣な話しぶりはここのところずっと、人類に見られないものだったので、有識者会議の面々はびっくりして、そしてみんなはすぐに苦笑した。彼の提案は即座に彼以外の全員の一致で否決され、そして彼は「処分」される事となった。そして彼は処分された。

・・・・・・・それからすごく長い時が経ち、その科学者の言うところは本当となった。時がたつにつれて「処分者」の量は増え、それはとうとう人類の三分の一にまで達したのだった。そして改めて、このシステムに対する再検討がはかられた。それは第百二十一回(途中、長い中断機関を経て)の人類有識者会議での事であった。そして、その再検討が真剣にはかられる途上で、その古い昔に、そうした事を主張していた若い科学者が以前にいたことが、昔の議事録から発掘され、彼は長い時を経て、その名誉を回復されたのだった。

さて、人類の未来は明るい。